

柿本人麻呂の歌（1）歌集歌と雑歌

六五〇	白雉元	庚戌	孝徳	中大兄皇子	柿本人麻呂この頃生か
六五一		辛亥			
六五二		壬子			
六五三		癸丑			
六五四		甲寅			
六五五	斉明元	乙卯	斉明		孝徳天皇没。高市皇子生
六五六		丙辰			
六五七		丁巳			
六五八		戊午			有間皇子刑死
六五九		己未			
六六〇		庚申			
六六一		辛酉			新羅に進発。大伯皇女誕生。斉明天皇没
六六二	天智元	壬戌			大津皇子誕生。白村江の戦い。百濟滅亡
六六三		癸亥			
六六四		甲子			
六六五		乙丑			
六六六		丙寅			
六六七		丁卯			近江大津宮に遷都
六六八		戊辰	天智		蒲生野に遊獵
六六九		己巳			藤原鎌足没
六七〇		庚午			
六七一		辛未			天智天皇没
六七二	天武元	壬申			壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都
六七三		癸酉	天武		
六七四		甲戌			
六七五		乙亥			
六七六		丙子			
六七七		丁丑			

七一〇	七〇九	七〇八	七〇七	七〇六	七〇五	七〇四	七〇三	七〇二	七〇一	七〇〇	六九九	六九八	六九七	六九六	六九五	六九四	六九三	六九二	六九一	六九〇	六八九	六八八	六八七	六八六	六八五	六八四	六八三	六八二	六八一	六八〇	六七九	六七八		
		和 銅				慶 雲			大 宝				文 武										持 統	朱 鳥										
三	二	元	四	三	二	元	三	二	元	四	三	二	元	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	元	元	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七		
庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅		
		元 明										文 武																						
					石上 麻呂							多治比 島				高市 皇子																		
平城遷都		柿本媛没。柿本人麻呂この頃没か						明日香皇女挽歌 大宝律令を制定 大宝律令を施行					高市皇子没。高市皇子挽歌		藤原宮に遷都		高市皇子太政大臣に任官 吉野行幸歌 この頃、阿騎野の歌										天津皇子朝政に参画						人麻呂歌集の七夕歌（非略体歌） 草壁皇子立太子	

*従四位下柿本朝臣佐留卒す。（続日本紀 和銅元年四月二〇日）

柿本人麻呂歌集歌の略体歌と非略体歌

◎略体歌

・春楊はるやなぎ 葛山かづらきやまに 發雲たつくもの 立座たちてもみても 妹念いもをしぞおもふ (一一・二四五三)

◎非略体歌

・雪ゆき 己曾波こころせなは 春日消良米はるひきふゆり 心こころ 佐閑さかた 消失多列夜きえうせとれや 言母不往来こともかよはぬ (九・一七八二)

合計	非略体		略体		雑歌	相聞	挽歌	合計
	短歌%	旋頭歌%	旋頭歌%	短歌%				
一三〇 三六・一	九八 七七・二	一四 六六・七	九 六四・三	六 四・六		一八七 九五・四		一九六
二二三 六二・五	二四 一八・九	七 三三・三	五 三五・七					一四
五 一・四	五 三・九							二一
三五八	一二七							二一

雑歌に七夕歌一首

雑歌に七夕歌三七首

柿本人麻呂歌集歌から

【略体歌】

- ① 春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りにけるかも (一〇・一八九六)
- ② 君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも (一一・二三八一)
- ③ うち日さす宮道を人は満ち行けどわが思ふ君はただ一人のみ (一一・二三八二)
- ④ 朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに (一一・二三九四)
- ⑤ 遠き妹の振仰け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたなびき (一一・二四六〇)

【非略体歌】

- ⑥ 天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ (七・一〇六八)
- ⑦ あしひきの山川の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ちわたる (七・一〇八八)
- ⑧ 巻向の山辺とよみて行く水の水沫のごとし世の人われは (七・一二六九)
- ⑨ 御食向ふ南淵山の巖には降りしはだれか消え残りたる (九・一七〇九)
- ⑩ ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも (九・一八一二)

【旋頭歌】

⑪ 夏影の房の下に衣裁つ吾妹 裏設けてわがため裁たばやや大に裁て

(七・一二七八)

⑫ 君がため手力疲れ織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺りてば好けむ

(七・一二八一)

⑬ はしたての倉橋川の石の橋はも 男盛りに我が渡りてし石の橋はも(七・一二八三)

⑭ 泊瀬の斎槻が下に我が隠せる妻 あかねさし照れる月夜に人見てむかも

(一一・二三五三)

⑮ ますらをの思ひ乱れて隠せるその妻 天地に通リ照るともあらはれめやも

(一一・二三五四)

《参考》【片歌】

即ち、其の国より甲斐に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、歌ひて曰はく、

25 新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

尔くして、其の御火焼の老人、御歌に続きて、歌ひて曰はく、

26 日々並べて 夜には九夜 日には十日を

是を以て、其の老人を誉めて、即ち東国造を給ひき。(古事記・景行)

柿本人麻呂の雑歌から

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

① 玉櫛 畝火の山の 櫃原の 日知の御代ゆ 或は云ふ、宮ゆ 生れましし 神のこと

ごと 樛の木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 或は云ふ、めしける 天

にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越え 或は云ふ、空みつ大和を置きあをによ

し奈良山越えて いかさまに 思ほしめせか 或は云ふ、おもほしけめか 天離る 夷には

あれど 石走る 淡海の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ

天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の

繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 或は云ふ、霞立ち春日か霧れる夏草か繁くなりぬる

もしきの 大宮処 見れば悲しも 或は云ふ、見ればさぶしも (一・二九)

反歌

② ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ (三〇)

③ ささなみの志賀の 一に云ふ、比良の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも 一に云

ふ、逢はむと思へや (三一)

軽皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

- ④ やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす
京を置きて 隠口の 泊瀬の山は 真木立つ 荒山道を 石が根 禁樹おしなべ
坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる 夕さきりくれば み雪降る 阿騎の大野に 旗
薄 小竹をおしなべ 草枕 旅宿りせず 古 思ひて (一・四五)

短歌

- ⑤ 阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも 古 思ふに (四六)
⑥ ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し (四七)
⑦ 東の野に 炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ (四八)
⑧ 日並 皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向ふ (四九)

《参考》

紀伊国にして作る歌四首 (そのうちの二首)

- a 黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しも (九・一七九六)
b 潮気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し (一七九七)

…… (二首略) ……

右の五首 (そのうちの二首) は、柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ。

柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首 (そのうちの二首)

- ⑨ 留火の明石大門に入る日にか漕ぎ別れなむ家のあたり見ず (三・二五四)
⑩ 天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ (二五五)
一本に云ふ、家門のあたり見ゆ

柿本朝臣人麻呂の歌一首

- ⑪ 淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに 古 思ほゆ (三・二六六)



田原本町

橿原市

桜井市

飛鳥

明日香村

近鉄大阪線

宇陀路大宇陀

阿騎野GO

169

166

370

166

169

585

567

467

152

851

904

82

大宇

カザグ

安騎野

大宇陀関戸

阿騎野GO